



25回目を迎えた教育懇談会

―若い世代への引継ぎ―

秋田市退職校長会会長 千葉 昭

秋田市現職・退職校長会教育懇談会は二十五回を数えその時々々の教育課題について懇談し、その後は胸襟を開いての懇親の会がもたれた。

数年前までは発表形式をとってきたが、両者の話し合いで現職・退職校長会の見えない壁を低くするため、ワークショップ形式やパネルディスカッションなどを取り入れ、フロアもグループ形式にして討議し易い場づくりにも配慮してきた。

今年度は、教職員の大規模退職時代を目前にして、本県の「全国学力・学習状況調査」十年連続トップクラスの原動力である学校力（教師力）の研修の在り方を探るアンケートの秋田市分を活用して実施した。

アンケートの内容は、これまで築き上げてきた学校力（教師力）を保持しつつ、なお一層の教師の資質向上を目指し、若い世代へ引き継いでいくための「自己研修の在り方」について調査するもので、二十代～五十代・六十代以上の教職員や退職校長会員にお願いした。

昨年十一月に開催された教育懇談会のグループ討議の一部を紹介すると、授業で大切にしてきたこととして、児童生徒に応じた教材研究や指導案の作成が話題になった。最近は特別なことがなければ指導案に添った授業展開が少なくなった。授

業改善の意味でも習慣化させたいものである。

役立度が高いのは「同僚との対話」「校内研修」「学年部会等」であるが、各学校が小規模化のため学年部会や教科部会が機能せず全体で行われることが多くなり、個々の教師を育て鍛えるまでに至っていない現状も出された。

注目されたのが「管理職の指導」だった。人事評価が制度化されたことで、二十代～五十代での役立度が高く六十代以上のとの差が大きい。人事評価によって教員と管理職との関わりが近くなり、授業改善や生徒指導などでもコミュニケーションの機会が多くなり望ましい状況である。

ここまでグループ討議のほんの一端を紹介したが、このあと、秋田の教師がどんな自己研修をし、授業力向上をどう図って子どもたちに向き合ってきたかの解明を楽しみに待ちたいものである。

年々退職校長会の事業への参加が少なくなっているのが残念である。平成三十年十月には、東北地区退職校長会協議会秋田大会が秋田市で開催される。

また、翌年の平成三十一年度は、秋田県退職校長会創立五十周年の記念すべき節目の年である。会員の皆様のご支援ご協力をお願いいたします。

現職校長会との 教育懇談会から

十一月十一日（土）協働大町ビルにおいて、現職・退職校長会合同懇談会が開催された。

開会式では小学校長会平塚和博会長、退職校長会千葉昭会長の挨拶に続き、ご来賓の中央教育事務所七尾尊志所長、秋田市教育委員会嶋崎公人教育次長からご祝辞をいただいた。

今年度は「学校教育の活性化に向けて」を懇話題とし、配布資料「退職校長会からのアンケート中間報告」をもとに、「教師力向上に向けて」を視点としたグループ協議を実施した。

グループ協議の概要

【授業の大切度】

〈①発問・板書②学び合い③基礎・基本〉が高いスコアを示し、それに話し方・褒め方、授業のルール、が続いている。

〈発問・板書〉

・授業の基本中の基本、先輩から後輩へと大切に受け継がれてきた授業技術であり、次期学習指導要領に向けてますます重要になると思われる。

・発問によって学び合いを活性化させ、子ども

もの自主性の扉が開かれる。板書は、めあて、まとめ、振り返りなど一連の授業の流れが分かり、探究型授業で大きな役割を担っている。

〈学び合い〉

・個人思考を集団思考へと練り上げるうえで重要である。若い人たちが秋田の探究型授業を重視していることの表れではないか。

・現職のパーセンテージが高いのは「主体的・対話的で深い学び」を意識したものであると考えられる。

・学び合いを重視するから、発問・板書に重点が置かれる。可視化することが大事にされている。

・学び合いを成立させるためにも、授業ルールが大切になってくる。最近の子どもの質が大きく変わってきている

ので「授業のルール」を意図的に指導しないと集団の学習は成立しない

・道徳についても主体的・



アンケート中間報告（秋田市集計分）

【大切度】

< 全 体 >	< 20～50代 >	< 60代～ >
① 91.8% 発問・板書	① 94.5% 発問・板書	① 89.0% 話し方・褒め方
② 89.0% 学び合い	② 93.4% 学び合い	② 87.8% 達成者への指導
③ 89.0% 基礎・基本	③ 89.6% 基礎・基本	③ 87.5% 基礎・基本
次 88.2% 話し方・褒め方	次 89.0% 授業のルール	次 85.1% 発問・板書
〃 87.7% 授業のルール	〃 87.7% 話し方・褒め方	〃 84.9% 練り上げの工夫

【役立ち度】

< 全 体 >	< 20～50代 >	< 60代～ >
① 87.4% 同僚との対話	① 89.4% 同僚との対話	① 87.6% 校内研修等
② 82.2% 校内研修等	② 79.9% 校内研修等	② 82.4% 同僚との対話
③ 72.3% 管理職の指導	③ 72.6% 管理職の指導	③ 81.1% 学年部会等
次 70.4% 学年部会等	次 66.0% 学年部会等	次 77.8% 自己研鑽
〃 62.5% 指定研修等	〃 58.7% 指定研修等	〃 77.0% 公開研究会等

対話的な学びを模索している。深い学びへとつなげて行けたらと感じている。

〈基礎・基本〉

・学習指導要領が基礎基本なので、（秋田の先生方は）学習指導要領を大切にしている表れではないか。

・現職と退職では違いがある。現職が大事にしたいことは基礎基本。退職者は基礎基本の上に、さらに高いレベルを求めている。

【教師力向上に関する役立ち度】

〈①同僚との対話②校内研修③管理職〉の指導が高いスコアを示し、それに学年部会、指定研修等、が続いている。

〈同僚との対話〉

・同僚との授業づくりに関する情報交換は、より実践的な研修として役立っている。

・日頃の生活の中で「これ何だ？」という会話のやり取りが役立っている。

・学年部会を設定する時間がなかなか取れないので、職員室や廊下、放課後の時間等を活用して、生徒指導の悩みや保護者のことなどを話している。

〈校内研修〉

・同僚との対話と同様、自分に近い人との研修を重視する傾向が強まっている。反面、校外研修を希望する人が減少している。

・他県の先生方は「どの先生方もノート、学び方の指導など、当たり前のことを当たり前にやっているのが素晴らしい、校内研修等で

共通理解できているのではないかと指摘している。

〈管理職の指導〉

・学年部の人数が減少している、また若手にとっては年の近い同僚がいらないのが悩みである。

その分、管理

職の指導に依存する傾向があるのではないかと。教職員人事評価が本格的に始まって以来、管理職がこまめに授業を観察し、先生たちの相談に乗り、指導する機会が増えている。信頼関係に基づいた指導の成果ではないか。



教育懇談会に 参加しての感想

戸島小学校 嵯峨 房和

紅葉を終えた落ち葉が風に舞う十一月十一

日（土）、協働大町ビルで本会が開催されました。私は本会への参加は初めてで、ほとんど予備知識もなく、不安な気持ちを抱いての参加となりました。

当日、受付を済ますと、会場には、これまでお世話になった先生方がたくさん見えられており、不安な気持ちも和らいでいきました。会が始まると、開会式に続き研修のメインである懇談会が行われました。懇談会は七人くらいのグループ（退職と現職の先生方の混合グループ）で、「学校経営の活性化のために」～一人一人の教員の「教師力」の向上に向けて～というテーマのもと、退職校長会で行ったアンケート調査（授業力向上のために大切なものは何か、同じく役立ったものは何かを調査したもの）を参考にし、話し合いが行われました。退職された校長先生方からは、豊かな経験に裏打ちされた示唆に富んだお話を聞くことができました。また、現職の校長先生からも、現在自分が実践していることや、そのことに対する思いが語られました。一時間半という時間でしたが、あっという間に過ぎてしまいました。懇談会の後は懇親会が開催され、たくさん先生の先生方と旧交を温めることができました。

本会に参加し、退職された先生方の秋田を思う気持ち、秋田の教育に対する自負、自分たちのもっている教育資産を後輩たちに継承し、秋田の教育水準の維持向上に寄与したい

等の熱い気持ちに触れさせていただいたことが、かけがえのない財産となりました。今後は、諸先輩の先生方の熱い思いに応え、秋田の子どもたちのため、更に力を尽くしてまいりたいと思います。最後になりましたが、会の企画運営に当たられた先生方に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

太平中学校 鎌田 悟

現職校長会では、小中合同懇談会などに年に数回あったり、会議等で席を共にする機会があったりしますが、このように退職された校長先生方とお話をさせていただく機会は滅多にないことです。どんな先生方がいらっしゃるのかと期待して参加させていただきました。

懇談会には、過去に同職させていただいた先生やお名前だけは知っている先生方など年齢を問わず多くの先輩方が参加されていて少し驚きましたが、何よりもお一人お一人の校長先生の御元氣な姿に、私自身が元氣をいただきました。「自分が退職してもこのように元氣に懇談会に参加出来るか」と懷疑、自問自答しながら先輩である校長先生方のご自分の経験からにじみ出る話について聞き入ってしまい、貴重な時間はあつという間に過ぎてしまいました。

今年の教育懇談会テーマには、秋田の教育が全国トップクラスを維持している背景を探る意図があったと聞いております。この視点は、教員の大量退職を目前とした秋田県や秋田市が明らかにしておかなければならない重要な課題であり、秋田の教育を支えてきた先輩方の経験と実績が、解明の糸口になることは間違いないと思います。さらには、このように退職校長会が独自のアンケート項目をもって調査し、分析を進めていることにも改めて感謝申し上げる次第です。

今後とも本懇談会が、現職や退職を問わず共に歴史を紐解き、これからの秋田の教育を創造すること、次世代に未来へのバトンを確かにつないでいける貴重な機会となることを祈念しております。そのためにも先輩方には、貴重な御示唆をいただけますよう健康に留意され、来年もお会いできることを願っております。

退職校長会 衣笠 昭生

縁があり、平成二十九年度の教育懇談会に参加しました。「学習指導に関するアンケート」調査結果をもとにして、調査の趣旨説明・グループ討議が行われました。

この調査の趣旨として、近年の秋田県の高い学力には、教師の関わりが重要であると考え

えたようです。半世紀前の秋田県の学力は、県別で下位にあったように聞いています。その後、教育界が総力をあげて取り組んできたことがようやく実を結び、結果として評価されたものと思われます（調査方法が異なるため一概には言えないが）。

教師は、授業を通して必要な学力を身に付けさせることが本務で、そのためには授業を大切にすることが基本であり、教師の指導力が問われることにもなるのです。総じて秋田の先生方の授業への取り組みには素晴らしいものがあり、他県の先生方に引けを取らないと思っている者の一人です。

学力向上の対応には多くの事柄が考えられるが、教師の指導力も一つの要素と仮定した時の課題が、問題提起されているようでした。折角の秋田県の学力が、教師の歪な年齢構成（五〇歳台が六割、四〇歳未満が一割）により、ベテランの先生が退職した時、この蓄積されてきた指導力を受け継いでいくことが困難になることが危惧されるからです。教師の指導力がどのように受け継がれてきたかについて、数的に説明しようとしたのがこの調査であり、年齢区分をもう少し細分化すると、もっと明白になるものと思われます。退職校長会として素晴らしい取り組みをされたことであり、是非、これを秋田県教育行政に生かされることを期待したいものです。

交流のまど



「語り部」活動十三年

伊藤 薫

戦後、わが国は焦土と化したにもかかわらず、今日の繁栄をみたのは「先の大戦による英霊や民間人の尊い犠牲の上にある」のだから、こうした思いが一般社会に薄らぎ、風化しつつあると同時に、今や戦争を知らない世代の人が年々増加しているのが現状である。

こうした現実を憂慮し、私は平成十七年（終戦六十周年）に「平和・追悼を考える私の主張」と題した作文コンテストの創設を秋田市戦没者遺族会に提言し実施することにした。その結果、市民や学校から多くの応募作品が集まり、優秀作品は「秋田地方大会」で発表していただき、出席者へ深い感銘を与えた。

こうした活動により、平和学習への教師の認識が高まると同時に、子ども達自身が平和に対する感謝の念をもつようになった。さらにコンテストに応募するための聞き取り調査ということ、祖父母らとの交流が一層深まったことである。

一方、私はコンテストに応募した学校の子ども達に御礼の気持ちで私が戦中・戦後に体験した事実を聞いてもらうことにしたが、こ

れが「語り部（個人）」活動としてのスタートとなった。

しかし、時の流れと共にこうした活動は、いつまで出来るだろうかと不安が脳裏をよぎった。こうした矢先、当時文科省は、新学習指導要領の施行にあたり「第二次世界大戦で日本国民が受けた被害について学習する機会を充実させる」との発表を目にし、戦争被害については戦後生まれの教師だけに任せず、戦没者遺児として戦中・戦後を生きぬいてきた私たちが積極的に取り組む必要があるの思いも重なり、これまでの一人活動から「組織活動」に移行すべく仲間呼びかけ、ここに秋田市戦没者遺児による「語り部の会」が誕生したのである。

以来、十三年間で市内小中学校は延べ六十七校一般諸団体は十三会場で実施した。

実施後、多くの子ども達から感想文が寄せられるようになった。その中で特に心を打たれる事は、(1)戦争の悲惨さを後生に伝えたい (2)戦争はお互いの理解が不十分な為に起こると思うので話し合いを大事にしたい (3)自分たちの手で出来る平和活動をしたい等これまでとちがった心情の変化と今後の決意が、どの文にも見られることだった。

以上、これまでの取り組みについて概要を述べたが、こうした「語り部」活動の仲間も高齢化の波はさけることもできず、「不戦を訴え、平和の尊さ」を語る後継者をどのようにして得るかが喫緊の課題であり、その対応

策について模索しているところである。

(平成七年三月退職)

元気を求めて



高橋 裕子

二人合わせて百六十七歳。病院通いはしているが、何とか二人で生活できていることに感謝している。できるだけこの生活を長く保つには……と日々考えている。

健康のためには、まず食生活が大事。一日三度の食事のメニューを考えるのは、脳のためにもいいらしい。睡眠は十分とれている。八十七歳の夫は、年齢相応に体力が落ちてきている。朝夕のタロー（犬）との散歩、病院へは一人で行ってくれるのでありがたい。

わたしは、腰痛にも悩まされながらも、食事への配慮、家事一般、体力に応じてやっている。二人とも、体は年齢相応に元気である。心配なのは呆け。わたしが先に呆けるわけにはいかない。土曜日の朝日新聞のbeパズルに応募したり、読書などほしたりしている。親しい女友達との昼食会で、おしゃべりするのは楽しいし、ストレス解消にもなるようだ。心がけているのは、所属する会にはできるだけ参加し、講演等で脳に刺激をいただくことだ。

今年の秋田市現職・退職校長会教育懇談会にも期待して出かけた。

「学校経営の活性化のために」「退職校長会からのアンケート調査結果をもとに」話し合われた。

懇親会でのA先生との会話がゆとり教育に及び、先生がB中学校長時代に学校訪問した時、熱く語っていただいたことを懐かしく思い出した。現場の先生たちが、こんなに子どもたちの成長を考え実践してこられた「ゆとり教育」が失敗だったような話は信じられませんか。先生たちにも、子どもたちにも失礼です。あの時代に育った子どもたちには、心にゆとりを持った学習の成果があったと思います。(話がそれてしまいました)

これからも「二人揃って元気」のため、夫の健康に気を配り、できることは二人で協力し合い、できるだけ社会との接触を心がけていきたいと思っている。

(平成十年三月退職)



そのうちに？

鈴木 廣 司

今年もまたテニスに明け暮れてしまった。県内外の大会にフル出場した。七十歳代の部に昇格(?)し、相棒と運に恵まれ、秋田で開催された「ねんりんピック全国大会」で三位、東北マスターズ一位という望外な結果でシーズンを終えた。だが何故かすっきり満足という気にならない。それは、退職後

一番やりたいことを後まわしにしているからだ。また、やらなくてはいけないことも、そのうちにと眼をそらしてきた。テニスはちよつとの暇つぶしのはずだった。

そんな時、大切な後輩の突然の死に直面する。彼は退職後児童センターの仕事に就き、私がボランティアでやっているサイエンス教室をサポートしてくれていた。亡くなる二か月前、教室を終え「また飲みに行きましょう」「いいね。そのうちに」と約束して別れた。その後、彼が入院したとの知らせが入る。見舞いに行くと「後を頼みます」と言う。その言葉を残して、一週間後に息を引きとった。

そのうちにという約束は消えた。何ということだろう。我々の年齢になれば、そのうちは無く、やるべきことは「今でしょ」しか無いのだと痛感させられた。

彼の最後の願いに応えられるように、サイエンス教室の継続と充実を目指そう。私の机の上に新型の紙ヒコキが未完成のまま放置されている。内容の刷新も必要だろう。彼に任せっきりだったスケジュールも今度は自分で作らなくては。

私にはやらなくてはならない事がたくさんある。今までお世話になった方々への不義理の数々も気になる。ボケる前に処理すべきこともある。今のうちに思いつくものから片付けようと思う。

そして、自分がやりたかったことの中から今できそうなことに挑戦しよう。

退職して十年目の節目に考えさせられたことである。

(平成二十年三月退職)



今は走る人：

佐々木 康 二

退職二年目を過ごしています。教員として車で三十五年間通勤し、最長の通勤距離は片道三十四kmほどでした。現在の勤務先は自宅から徒歩で片道十五分二十分です。会う人にこの話をする「健康維持にちょうどいいですね」とほとんどの人に言われます。実は、片道三十四kmの通勤のときを含めて、現職のラスト十年ほどは、毎朝五時に起きてウォーキングやジョギングをしていました。ここ五年ほどは、ほぼ毎日走るようになり、飯島小の校長時代も平日は6km、休日は10km、月に二〇〇km前後を走っていました。10kmのレースに三回出場しました。飯島小の職員と「チーム飯島」としてリレーマラソンに二回出場しました。校長会の送別会では、退職後にやってみたいこととして「フルマラソンを走りたい」と話しました。

昨年度四月からの第二の職場での生活が始まってからは、週五十km以上・月二〇〇、二五〇kmほど走るようになりました。ところが、仕事と生活パターンの変化は、腰痛や膝痛などの故障となって現れました。退職一年

目はそのような故障を抱えながらも、メロンマラソンのハーフ、田沢湖マラソンの二十km、五城目朝市マラソンのハーフの三つのレースを走りましたが、フルマラソンを走れることは実現できませんでした。秋田がシーズンオフとなる冬も、有楽町、中央通り、南通りなどの歩道が融雪されるところをほぼ毎日走り、走力維持に努めました。今年度は「故障しないようにしながら、走力をアップしてフルマラソに出場する」を目標にトレーニングし、十月に弘前のアップルマラソンのフルを走りました。五、七、九、十月に走った四つのハーフのレースでは、ほぼ自分の思い通りに走れましたが、十月の初フルマラソンでは思ったような走りができず、フルマラソンの難しさを実感しました。次にフルを走るときは、イメージ通りのレースができるようにトレーニングしていきませんが、何よりも楽しく走ることが一番と思って、これからも走り続けたいと思います。

(平成二十八年三月退職)

楽しい研修会

参加者お待ちしてまーす

昨年に引き続き四つの「研修」を実施しました。参加した方の充実感や満足感をお裾分けします。

一 日帰り各駅停車の旅第二弾 秋田駅発着「奥羽山脈を越えて！越える！」に参加して

佐々木 信吾

「あなたは各駅停車の列車に乗ることがありますか？どこか懐かしい峠越え…昔ながらの駅舎…と鉄道風景が続きます。ゴツゴツン々々の中でのおしゃべりや駅弁も楽しみです。」

これは一切を企画されご案内くださる佐藤重義先生のお誘い文です。

平成二十九年八月二十七日(日) 秋田駅 発午前七時二十九分 大館 十和田南(ス イッチバックの駅) 盛岡 北上 ほつとゆだ(温泉駅) 横手 秋田駅着 午後四時九分トピコビルで汗流しの生ビール。

見事な好天のもと花輪線の峡谷 雄大な岩手山 一時は奥羽線越えのエースだった北上線 横手・仙北の日本一の田園地帯等、車窓から十分に堪能。加えて部活帰りの高校生や通院・買物等の乗客の様子は、まさに生活の姿そのもの。とてもなつかしく、身近に感じられた。



ぐるっと一周。老人でも使える「青春切符」のおかげで三千円(二万円以上?)が何んとも嬉しい。仲間と心身ともリフレッシュできた至福の旅行だった。

※前年(平成二十八年年度)の「第一回各駅停車の鉄旅」も楽しかった。秋田を発って日本海を南へ、酒田から最上川

ラインへ。そして新庄を経て秋田着。秀麗鳥海山を一巡、まさにトライアングルの旅でした。

※佐藤重義先生は、知る人ぞ知る「日本の鉄旅の権威」二十年全国津々浦々、本線・支線・私鉄の探訪をライフワークとされてきました。近年は全国約三百十の「行き止まり駅」に挑戦：昨年残りの五カ所を完遂。ついに一切が終了。次はどこへ？

今回二回の研修にあたり、十ページあまりの心のこもった明快な案内葉を手作り等、全てに感謝。参加者一同心よりお礼申しあげます。

※ 私こと この正月早々(一月五日)、市立病院の定期検診で自覚なかっただけに、心電図結果(重度の不整脈・徐脈)に驚く。絶対安静のまま即入院。十五日に脳研へ再入院。ただちに心臓カテーテル手術、ペースメーカー埋め込みの手術を受ける。今日の先進医療と名医やその神の手に救われ月末に退院。

思えばこの十年、癌で胃(胆のうも)全摘。前立腺全摘手術に続く三回目の試練でしたが皆さまのお陰で生還できました。向後八十路の人生、健康第一に、明るく元気に「スロウライフ」を楽しんでまいりたいと念じています。

(平成三十年二月十五日記)

二 工芸・銀線細工・和綴じ

平成三十年二月七日(水)、日本の伝統的な和綴じを学ぶ研修会が赤れんが郷土館で行われました。参加者は少なかったのですが、和紙や大和糊、麻糸などから製本する技術を学びました。「自分史」の製本にも活用できそうです。



三 管楽器の調べ
 ↳アトリオン音楽ホール・文化の研修
事務局より
 ワンコイン演奏会を楽しみながら研修として紹介して三年目になり、会員も心待ちにしていたところでありました。
 二月十日(土)午後二時開演、中嶋尚之氏のピッコロトランペットは水と風を得たようにヘンデルの水上の音楽を奏で始めたのです。弱冠二十八歳、これほどの優れた管楽器奏者が秋田市教育の中で培われ、山形大と東京藝大で研鑽を積んできた証しの演奏でした。※彼の言葉『人間の自ら出てくる溢れんばかりの音楽』を(吹く)というよりも(歌う)ような響きで届けます。
 会員の皆さま、またご案内いたします！ぜひご参加ください。

四 酒造探訪「天の戸酒蔵」へ

大山 重幸

二月二十六日(金)、十一名の参加を得て開催しました。

一時間ほど『天の戸』の酒造行程を見学してから試飲。

この時期、この蔵でなければ味わえないいろいろなお酒を堪能し、大満足の研修となりました。

作品紹介



「不動明王ち火焰光」 羽深 進
 槐(えんじゅ)の太木から発想した火焰光(かえんこう)を、不動明王の胸の内を汲み取りながら制作し、炎の勢いと奥行きが感じられるように作品を配置しました。
 ・第五十五回秋田県彫刻連盟展
 ・第六十一回秋田美術作家協会展に出展

祝叙勲・瑞宝双光章

・秋の叙勲
 芳賀 龍平 秋田市川尻
 ・高齢者叙勲
 齊藤 俊雄 秋田市南通築地

謹んでお悔やみ申しあげます

平成三十年一月三十一日まで(敬称略)
 三浦 誠一 平成二十九年十月十七日逝去
 高橋 武彦 平成二十九年十一月三十日逝去
 小武海 信夫 平成二十九年十二月二日逝去
 鈴木 憲夫 平成三十年一月十六日逝去

事務局から

○平成三十年度年間行事予定
 ・秋田市退職校長会

監査 平成三十年四月十九日(木)午前十時半
 理事会 〃 四月二十八日(土)午前十時
 総会 〃 四月二十八日(土)午後一時
 講演会・懇親会 四月二十八日(土)午後二時十分

あとがき

今回も会員の皆さまのおかげで発行にこぎつけることができました。ご協力いただいた方々に心から感謝申しあげます。
 ところで、昨年暮れ十二月に入ってから、本会理事高橋武彦氏の訃報が入りました。自分と同期の「たけちゃん」の、あまりにも突然の悲しい知らせでした。奥様の話によれば、昨年春頃から疲れたということが多くなってきたが、八月の検診では全く異常は見つからなかったとのことでした。それが、九月になって専門医を受診したところ、すでに手の施しようのない状態で何も治療を受けることさえもできず旅立ってしまった。悔しいと涙を浮かべておられました。
 死因となつたのは大腸がん。日本人で大腸がんがんと診断される数はこの二十年間で二倍以上になっていくといえ、進行は遅く治る可能性も高いと言われていきますから、何かしら釈然としないうちが残り残りました。体の中で起こっていることとさちんと向かい合えなければという思いに駆られます。
 会員の皆さんも健康で。お元気で。

(編集委員 三條)